

東日本大震災の被災地で支援活動をした県民ボランティアらの貴重な体験記を県が報告書にまとめた。被災地に医師らを派遣した国際医療NGO「AMDA」(岡山市)も活動を本にした。現地の厳しい状況が手に取るように分かり、防災について考えるきっかけにもなりそうだ。

被災地での支援

記録に残す

東日本
大震災

防災考えるきっかけに

体験記など133編収録

県備中県民局 報告書やHPに

県備中県民局の「東日本大震災支援活動報告書―震災から学んだこと、伝えたいこと―」(A5判、471頁)。県民のボランティアや県職員、管内8市町の職員の体験記など133編に加え、100枚以上の写真掲載している。

「ところが、最大の医療支援になる」と結んでいる。県民局の担当者は「記憶は薄れるので、いま記録することが大切。『被災者の

津波で壊滅的な被害を受けた岩手県の陸前高田、釜石、大槌の3市町で6月にボランティアをした倉敷市の男性は、ヘッドロ除去やがれき撤去の活動を報告し、「これまで続かれがけきの山を見ると、我々の作業は重箱の隅をついた程度、とむなしくなった」と正直な思いを吐露。東日本大震災を教訓に「危険箇所のチェック、防災マップの整備、緊急持ち出し品のチェックなど、日ごろから注意して生活しなければ、どの思いを強くした」と記している。

一方、AMDAは菅波茂代表が編著した「AMDA被災地へ!」(四六判、455頁)を小学館スクウェアから出版した。AMDAの救援活動を総括し、医師や看護師ら活動に参加したスタッフだけでなく、被災者でもあった現地の医師らの声なども紹介している。

現地の医師らの声も AMDA 活動総括し本に

「西日本大震災は必ず来る」として、避難所近くに仮設診療所を早期に開設する仕組みや海外支援団体の受け入れ制度を整えることなども提言した。

定価1500円。県内の主な書店で販売中。問い合わせはAMDA(086・252・7700)へ。

(平井恵美)

AMDA被災地へ!

東日本大震災 国際緊急医療NGOの活動記録と報告

菅波 茂 著



市民参加型人道支援外交
―相互扶助による世界平和への道標形成―

2011年3月11日 発生した東日本大震災が東日本を襲った。千載一遇の機会を捉えたい。【日本人にはない】「救済と共生」の道を歩きたい。

AMDAの活動、そして被災地へと向かって県内外の人々が被災地へ! 緊急救助の現場から発信する世界の現状と未来への問い。

小学館スクウェア 定価1500円 | 2012年2月

東日本大震災支援活動報告書

震災から学んだこと、伝えたいこと



「永続的な治療のできる地域に根付いた医療が不可欠。街を再び蘇らせ

宮城県石巻市に5月に入った倉敷市の医療関係者は、高血圧など慢性疾患に苦しむ患者が多く、ヘッドロが原因でのごや目の不調を訴える被災者もいたと記した上で、「永続的な治療のできる地域に根付いた医療が不可欠。街を再び蘇らせ